

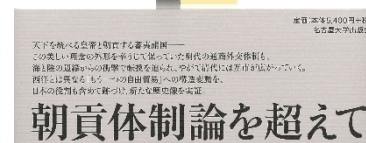
受賞作品

# 朝貢・海禁・互市

ー近世東アジアの貿易と秩序

岩井 茂樹 著

名古屋大学出版会 409 ページ、5,400 円（税別）



書評

## 東アジア通商 新たな解釈

総合地球環境学研究所特任教授 杉原 薫

中国を中心とする東アジアの通商と外交の歴史は、現代の国際秩序における中国の動きを理解する上での背景となる重要なテーマである。

本書は、14世紀後半から19世紀前半における朝貢（外交儀礼）、海禁（航海制限・居住制限）、互市（管理貿易）の関係を高い実証水準で論じ、これまで「朝貢貿易体制」として静態的に理解されてきた東アジアの通商・外交システムについて、互市の役割に焦点を当てることで新しい解釈を示したものである。

すなわち、16世紀中葉以降に発展した互市を、「儀礼を必要としない貿易」を可能にした、朝貢とは異なる制度だとし、「朝貢から互市へ」という通商外交体制の変化があったとしている。叙述の明快さもあって、論争誘発力は十分である。

従来は、19世紀に「朝貢から条約へ」という大きな転換が起こったとし、それ以前のすべての貿易は、儀礼を含む朝貢貿易だったと解釈されがちであった。しかし、互市は管理貿易だが参入は自由であり、交易の原理を国家の大義と切り離して追求する制度でもあった。つまり、東アジアには「もう一つの自由貿易」ともいえる通商秩序が存在したと著者は論じている。近世日本の貿易の解釈とも連動する重要な問題提起である。

グローバルヒストリーの観点からいえば、西洋が作り出した制度・思想としての「自由貿易」とは何であったかが、改めて問われることになるだろう。